論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報 告 番 号	博（生）甲第２５２号	氏　名	木下　元洋
学 位 審 査 委 員	主査　杉山　和一 副査　武政　剛弘 副査　石松　隆和		

論文審査の結果の要旨

木下元洋氏は、2007年4月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程に社会人学生として入学し、現在に至っている。同氏は生産科学研究科に入学以降、環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、音環境の分析・評価に関する研究に従事し、その成果を2010年12月に主論文「長崎市の市街地における音環境の分析と評価に関する研究」として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文2編（うち審査付き論文2編）、印刷公表予定論文1編（うち審査付き論文1編）を付して、博士（工学）の学位を申請した。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、2010年12月15日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2011年2月16日の生産科学研究科教授会に報告した。

音環境といえば騒音問題を思い浮かべるように、従来は騒音問題に関する研究が音環境研究の中心であった。もちろん騒音に関する研究の重要性は否定できないが、これまであまり議論されてこなかった音の内容や質に関する研究も、最近注目されるようになりつつある。このような音の質に関する研究としては、意味微分法（SD法）などの心理学的な手法を用いたものや音の周波数や強弱などの物理特性に着目した研究がほとんどであり、いずれも個々の音を対象とするものであった。これに対し、本研究では、音景観把握モデルをという概念を新たに提案し、このモデルを用いて屋外に存在する多くの音を４つの構成要素に分類している。さらに、このモデルと景観把握モデルの両者を用いることにより、場の景観と音景観の内容を視覚的に構造化することができるため、場の情景の評価や修景をする場合に有益である。以上の述べたように、本論文は音環境の分析・評価における新しい手法を提案し、その有益性を明らかにしている。

本研究は音環境研究において極めて有益な成果をもたらすばかりでなく、景観工学・音響工学の進歩発展にも貢献するところが大であることから、学位審査委員会は、本研究が博士（工学）の学位に値するものとして合格と判定した。